

一色いろはは狡さと可愛さと素敵で何かで出来ている。

囃子米

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

八月八日、一色いろはが高校卒業と共に千葉を発った比企谷八幡の元へとやってくる。思い出話と後悔とも言えるような難しい感情が渦巻く八幡はその急な来訪に戸惑うが――。

## 目次

一色いろはは狡さと可愛さと素敵な何かで出来ている。	1
チョコは甘いが一色いろははもっと甘い。	9

一色いろはは狡さと可愛さと素敵で何かで出来ている。

大学に入ってもう三年が経つ。高校卒業と共に俺は愛しい千葉を発つて東京へと移住。夢の一人暮らしだ。とは言ってもぼっちは治らず、朝起きて講義に赴き、それが終わればバイトに行つて家に帰り1日を終える。そんな無機質な日々が続いていた。

ただ、今は夏休みで無機質な日々がさらに意味の持たないものになり始めた。高校の頃からそうだが、究極のぼっちは夏休みが暇だ。最初のうちは確かに楽しい。死ぬほど楽しい。忙しくてあまり手のつかなかったゲームや小説、漫画に勤しむ事ができる。しかしそれも束の間、ある一定まで満たされると次は虚無感が襲ってくる。だから仕方なくレポート、高校時代なら宿題に移る。しかしそれも終わる。本当の虚無感が襲ってくる。買い物に行つても安いTシャツと短パン、それと数冊の小説を買って終わる。飯もそんなに食わないからそもそも外に出る事が完全に潰える。

ほらな、ぼっちの夏休みの完成だ。みんながぼくの夏休みやろーぜつてとか言つてワイワイ八月三日をプレイしてる間に俺は隠された八月三十一日をやつてたまでである。

まあとどのつまり暇だ。長つたらしくぼっちの夏休みを1人でに解説することもまた虚しい。

「つーか今日何日だよ」

スマホを見ると八月八日を指していた。まだ八月の序盤、気は重くなる一方だ。そうしてそのままTwitterをいじる。閉じた。

ボーツと天井を眺める。暇が過ぎるので眠気が襲い、瞼を閉じようとした時、スマホに通知が届く。

『今から電話しますから』

一色だった。懐かしい奴からメッセージが来たもんだなと思つているのも束の間、次の瞬間本当に電話が鳴る。

「もしもし？ お前いきなりなんなの」

『なんなのって酷いですよ先輩!』

甘ったるい。声がかく甘ったるい。同じ講義受けてるイケメンにそこらの女が声をかけに行く時と同じぐらい甘い。もつとわかりやすく言う追い込んで高めに浮いたスライダー並みに甘い。ちなみに今のは川柳だ。

「はあく。で? 何? 金? やだよ俺」

『先輩は私をなんだと思ってるんですか……』

「あざとい後輩」

『終わりですか!?!』

「ああ」

電話の向こうからはため息が聞こえる。ため息つくために電話したの?

『今、東京に来てるんですけど』

「おう、観光か? 浅草寺あたりいんじゃない? 知らんけど」

『勧めるなら確信あるところにして下さいよ……ともかく! 今から先輩の家行きますから! 良いですね!』

「は? お前、なんで俺の家知ってるんだよ」

そういうと向こうから聞こえてくるのは無機質な音。通話が途切れたことを知らせる。絶対に小町だな。でもお兄ちゃん小町のこと大好きだから許しちゃう。

まあしかし、奇妙なこともあったもんだ。一色と会うのは二年ぶりかそこらだ。土地に慣れず、住んでいる地域一帯を歩いているとぼつたり、戸部を連れ回している一色と出会った。こちらに気付かないように努力し、音を殺して歩いたにもかかわらず目が合ってしまったために、一目散に歩いてきて問い詰められた果てに東京の大学に進学し、一人暮らしすることを自白させられる形になった。

困ったものだ。客人に用意するようなものは何にもないしテーブルがあるだけで座布団は一枚しかない。なんならコップも一個しかないし箸についても一膳しかない。なんだこの家。

「まあ、いいか」

そう言って再びベッドに体を預ける。正直、高校のことを思い出す

きつかけに出会うとは思ってもいなかった。由比ヶ浜と雪ノ下が仲良くやっているということは平塚先生や何故か偶然にも頻繁に会う陽乃さんからも聞く。ちなみに平塚先生は未だに結婚できていない。そろそろ本当にだれか貰ってあげてほしい。果実は熟れすぎると腐り落ちるからな。これを本人に言うのと殴られるのを通り越して泣きつかれるので絶対に言わない。

しかし、それ以外のことは本当に知らない。小町が新大学生だということぐらいだろうか。それもまあまあ有名な大学の。

本当に、知らないのだ。由比ヶ浜も雪ノ下も。あいつらがどこでどんな暮らしをしていて、何を思っているのかなんて。俺に知る権利もないだろう。

沈黙する俺の部屋にはエアコンの風の音がよく響いた。窓の外からは蝉の声やたら聞こえる。なんだか苛立った。高校時代を思い出せばいつもそうだ。あの頃の無力な自分にただ腹が立つ。

初めて酒を飲んだ日には平塚先生が横にいた。泣いていたらしい。俺は一体なにを成せたんだろうって。陽乃さんが酒に酔えない性分だと俺のことを評したが、あの時だけは違った。後にもあんなに泥酔することはなかった。『雪ノ下の依頼、本当に解決できたのだろうか。由比ヶ浜を笑顔にできたのだろうか』そうひたすら自分に問いかけて、そうして音のない返事に泣いたらしい。

記憶が飛んだ翌日の朝に平塚先生はベランダで煙草を吸っていて、俺にこう言った。『君は自分を誇れ。守れたものは手の内にないだけで、きつとあるはずだよ。人生はそんなものだ』と。諭すような微笑みと朝日を添えて、優しくそう言った。その後、隣に並んで俺もタバコを吸った。苦かったのを覚えている。からかうように笑われた。

正直、一色に会うのも心苦しい。いつも資格や権利が頭をよぎる。また、スマホが鳴った。

『先輩、多分ついたと思うんですけどマンションの玄関まで来てください』

「はあ？ まあいいけど。ちょっと待ってろ」

電話をすぐ切り玄関を出る。心臓がうるさかった。21年間捻く

れに捻くれた思考が頭をよぎる。そもそも、俺に一色と会う資格があるのだろうか。

階段を降りるとすぐに一色がいた。

「先輩、二年ぶりですね。音沙汰もなく何してたんですか」

「ああ、そりゃ、お前勉強に勤しんでたんだよ」

「下手な嘘をつく時目をそらすのやめましようね」

「皆、何気に心配してたんですから」

小さくそう言ったのを聞き逃せなかった。当たり前だ。俺はラブコメの鈍感主人公じゃないんだからな。都合のいいことだけを聞き逃したり、そんなことはできない。

「さ、先輩、家にあげてください。わざわざ八月の猛暑の中はるばる

やってきた後輩を軒先で追い返しませんよね？」

「もうここまでできた時点で分かってるよ。入れよ」

「わーい！ 先輩の家ー」

そういうと一色は一目散に駆け、俺のベッドに腰掛ける。

「なんか飲むか。つっても麦茶かマツ缶ぐらいしかねえけど」

俺の開ける冷蔵庫を見て何やら一色は絶句していた。

「先輩、それ本当にいつてるんですか？」

「は？ マツ缶舐めんな」

「いや、もうそれはどうでもいいんですけど。その冷蔵庫の中身。何も無いじゃないですか！」

「ああ、まあ二日ぐらい食わなくても生きていけるしな」

「死にますよ!？」

はあ、と一色は大きく溜息を吐いた。

「まあ、なんだ。前みたいに金に余裕もないんだよ」

「知ってますけど」

沈黙が続いた。やっぱり蝉の音とエアコンの風の音が響く。

「お前、今日なんで来たんだよ。夏休みだろ。友達と遊びに行ったりとかないのか」

「先輩ほんとバカですね」

「バカってお前」

一色は途中で俺の話遮る。立てられた人差し指を俺の唇に添えて。驚いて一色の方とは見ると赤面してそっぽを向いている。かくいう俺も自身の頬が熱を帯びるのが分かる。

「先輩に、会いに来たんですよ」

「先輩、今日誕生日ですよね」

誕生日。この二年祝ってもらったことが無かったからもう忘れていたが、そういえば八月八日は俺の誕生日だ。しかし、よりによってなんで一色が知ってるんだ。

「私、怖かったです。先輩が卒業した後には音沙汰も無くなって、なんだか小町ちゃんに聞くのも億劫になって。それでなんだかパーっと買物をしようと戸部先輩を引きずり回してた時に」

一色はそっぽを向いたまま今度は顔を下に向けた。ポツポツと紡がれる言葉は一色の心情を表しているように見えた。本当に、感情が態度に出やすい癖は治っていないらしい。

とはいえ戸部は引きずり回されてたのか。

「先輩に会ったんです。その時は少しいつか話してくれなくて、私に先輩と会う資格があるのかなって」

「由比ヶ浜先輩も雪ノ下先輩も同じ道に進んだのに、先輩だけが独りで、それで」

一色は嗚咽を漏らし始めた。床には涙の粒が落ちている。

「なんで自分のことじゃないのに泣くんだよ」  
「だって……」

不意に、小町を撫でていたみたいに一色の頭に手を置いた。何故そうしたのかは分からない。ただ、放っておけなかった。胸の奥が少しずつ暖かくなるのが分かった。

「すまん、いきなり」

「いえ、今はこれでいいです。四十点ぐらいあげます」

「高得点でどうも」

そのまま、隣に座った一色の頭を撫で続けた。少しずつ日が傾いていくのが分かって、時間の経過を感じる。

雪ノ下と由比ヶ浜は同じ道を進んで、俺だけが逃げるみたいに東京



へやってきた。後悔はしていない。どう転んだってこうなるのは仕方なかったのだと思うと後悔することもできない。それでも、一色は今日ここにやってきた。権利なんてくだらないことを気にして。

そして、そんな権利なんてくだらないと、塵にでもそんなことを思えたからこそ俺の心も少し軽くなったように感じる。

「手の内に残ってないだけで、きつと守れたものはある。か」  
ボソツと呟いた。

案外その通りなのかもしれない。そして、それを伝えてくれた一色は良い後輩で、良い女の子だ。こんな俺の後輩で申し訳ないとも思う。

「ありがとうな」

一色は俺に肩を預けて寝てしまっていた。こんな卑怯な俺は、こんな時にしか感謝を伝えられない。それでも、ありがとう。心からそう思う。

そうして、壁に寄りかかって俺も眠りについた。

目を開けると外は暗くて、ポツンと細道に立った一本の街灯が窓の外で明かりを灯していた。寝てしまっていたのが理解できた。けれど、部屋の中は暗くなかった。このワンルーム、キッチン辺りでなんだか音が聞こえる。

「あ、先輩おはようございます。というかこんばんは」

「んあ?」

思わずみつともない声が漏れた。

「何してんの?」

「目はもう治ったかと思ったんですけど。まだ腐ったままなんですか?」

やだこの子雪ノ下みたいなこと言う。そんな後輩に育てた覚えなんでしょうけど。というか本気で何してんだよ。あいつ料理作れたの?」

「さあ、ちょうど良い頃合いに起きましたね」

「いろはちゃん特製の料理です」

並べられてきたのは白いご飯に味噌汁、それと肉じゃが。そして脇にはほうれん草のおひたし。何というか和食だ。

「あー！ 今地味とか思いましたか!？」

「まあ、思ったけど。なんだ、ちゃんと飯食うのは久しぶりだから、ありがたい」

気恥ずかしくなって話題を変える。八幡まだ思春期終わってない。

「というか食器とかどうしたんだ？ 持参？」

「食器って書かれた段ボールがあったのでまさかと思って開けたらありました。正直ビックリしました引きました」

そういえばと思い出す。引越しの時に食器棚のスペースに入れるのがめんどくさくなって使う分しか入れてなかったのだ。コップも箸もその影響だ。ちなみに座布団が一枚なのは意図的だ。本当に客人は来ないものだと思っていた。

「無駄なことはしない主義なんだ」

そう言って目を逸らす。

「もはや無駄ですけどね」

「とにかく食べてください」

「いただきます」

味噌汁を啜ってから、おひたしを頂く。なんというかこの時点でもう涙溢れそう。おふくろの味よりおふくろの味してる。

「美味いわ。なんなら泣ける」

「それは引きますよ」

そうして俺の食うところを一色は満足げに眺めていた。なんだかとても懐かしい気がした。多分別に料理じゃなくても良かったんだと思う。俺が何かをして、それを一色が眺める。多分その事実だけで懐かしいんだ。

「先輩、私のお味噌汁毎日飲みたいですか？」

「ゴフツ！」

あまりにも小悪魔めいたその笑顔と、堪えるのに困る狡い質問で思わずむせ返る。

「バッカお前今感傷に浸ってたの見えなかったの？」

「ふふ、からかっただけです。私らしいですよね？」

そう言つて一色はまた小悪魔的に微笑んだ。こいつの笑顔も久しぶりに見た。心の距離も、本当の距離も、一回遠く離れたからこそもう一度分かる気がする。

「先輩、ハッピーバースデー」

一色は、このあざとい女の子は、狡さと可愛さと、それと素敵な何かで出来ている。

そんなことを思い出して、俺は言った。

「ありがとう。一色」

「やっぱりあざといよ」

チョコは甘いが一色いろははもつと甘い。

「せーんぱいっ!」

大学の学期も終盤、ボツチ継続中により特に焦ることなく提出の課題や試験を終え、悠々自適にキャンパスライフを送っていた。

と思っていたのも束の間に、街中で小悪魔に遭遇してしまう。大魔王よりかはマシなのかもしれないがこいつもこいつで中々だ。

「せんぱいっ!」

後ろに聞こえる甘ったるい声はもはや胸焼けがする。

というか誕生日に家に来てから味をしめたのか度々俺の家に凸るのはやめていただきたい。

「……せんぱい?」

「ひっ!」

何こいつ、何なのその冷たい声思わず変な声が出ちゃっただろ!!

そうして思わず後ろに振り向いたのが事の始まり。もう策略の中に嵌ってしまった。さながら蜘蛛の巣に絡まる蝶。やだ、俺つてば蝶みたい綺麗なのかもしれない。

現実逃避も束の間に横腹を手で突かれ意識を引き戻される。

「やっごごっち向きましたね」

いやウインクしても遅いから。怖いからお前。

「む、何ですかその怯えてる顔は」

「何なの? 心読めるのお前? すごくね?」

「はぐらかさないでくださいよ!」

「はぐらかしてはない。話題を変えただけだ」

「一緒ですよそれ」

とはいえ往来も往来、東京の街中は人が多くその割には面積が小さい。故に邪魔ではあるし腐っても美女なコイツと話す俺の構図が出来上がれば疎ましく思う者も決して少なくはない。

「とりあえずなんだ。近くのカフェ行か。邪魔だしこっ!」

「ふーん」

一色がニヤニヤとこちらを見てくる。なんか腹立つなその顔。

「……なんだよ」

「いえ。別に何にもありませんよーだ」

その態度がなんだか癩に触り、こちらもちちらで意趣返しをしてやろうと画策する。いいぜ、お前がその態度ならこつちだって策がある。

「あーあれか？ 声かけただけ？ なら帰るわじゃあな」

「待って！ ごめんなさい！ 本当に！ 行きましょ！ すぐ行きましょー！」

そう言つて一色が俺の腕をがっしり掴む。それはもう、とてつもなく。色んなものが当たってるしいい匂いするしでなんだかそれも腹が立つ。腐つても美女だわ。

意趣返しをしたつもりが思わないところで意趣返し返しをされたような気になり複雑な心境になる。

とは言え誘い出したのはこちらなのだから帰るのは道理にそぐわない。一度言つた事はある程度守るで定評のある俺はそのまま大学近くの行きつけのカフェへと歩き出した。

「ねえ先輩？」

「なんだ」

「今日つて何の日か知ってますか？」

道中、一色は隣に並んでそう尋ねてきた。

今日は二月十四日。さしもの俺もこの日が何の日か知らないわけではない。中学時代は苦汁を舐めさせられたこの日。

そう、バレンタインデーである。

一般的には世の女性が好いている男性にチョコレートを渡し、想いを伝える日である。最近なんかは親愛や友情を表すものとして義理チョコなるものが存在している。なんなら表面上を繕ったビジネスフレンドとも交換するというのだから薄っぺらな行事も甚だしい。滅ばばいいのに。

だからこそ一色に俺は自信を持ってこう答える。

「第一回箱根駅伝が開催された日だろ？ 確か大正9年に」

そう、今日は第一回箱根駅伝の日である。箱根駅伝は普通に好きだ

し、加えて走行ルートのポイントに戸塚という名前もあるしとても好きだ。

チラと横目で一色を見遣るととても引いている。視線の温度も0Kになってる。絶対零度である。あの技中々当たらないんだよな。

「非リアってそういうの詳しいですよね」

「やめる悪かったから、ちゃんと答えるから」

「最初からそれでいいんですよ。じゃあはい、今日は何の日ですか？」

「……………バレンタイン」

「うわすつごく嫌な顔しましたね」

「そりやもう嫌だ。クリスマス次のくらいに嫌いだからな」

一色が今度は悲しそうな目でこちらを見ている。やめろ。やめてくれそんな目で俺を見るのは。

「なんだ、まあ小町からは毎年、もら、え、てる？」

「なんですかその言葉覚えてたの機械みたいな発音は」

「いや、そう言えばこっち来てから誰にももらってないなと思って」

「元からじゃ？」

「ばっかお前小町からはずっと貰ってたし高校入ってからは戸塚からも貰ってたわ。あいつ絶対俺のこと好きだよな」

「妹と男友達から貰ったチョコ自慢して楽しいですか？」

「うるせえ。無駄口叩くなら奢らねえからな」

「先輩って友達思い妹思いで素敵ですよね」

現金な奴め。金の話になると180。言動を変えやがった。

とはいえもう店の前には着いたのでそそくさと入ることとする。

「え、何これ映える」

一色がカフェの外観を見て思わず2、3枚はパシヤリした。どうも最近の子はやれインスタ映えだのが多くて困る。

だがまあ便乗しないのは失礼にあたるので一応俺も写真を撮っておく。

そうして木製のドアを開ける。

カランコロンとドアベルの音がなり、店内のBGMはアコースティックギターの落ち着く音色。人はちらほらと見受けられるがお

昼時を微妙に過ぎてる今は繁盛と言えるほどの人はいない。

「はえ〜先輩こんなところ知ってるんですね」

一色は古洋風じみたカフェの内装を見てそう言った。

たしかにお洒落ではある。なにせ明治時代後期に創業してからずっとあるらしく、所々にこのカフェの写った褪せた白黒写真も見受けられる。

「二名様で？」

ウェイターの一人がそう尋ねてきた。俺がただ頷くと席を案内される。

対面に座れる場所で、陽の光もちょうどよく差し込む。

ほんのすこしだけ、教室を思い出した。

「で、なんでわざわざ呼び止めたんだよ」

「そりゃ先輩がいたからですよ」

さも当たり前のようにこいつはそう言った。すげえな、生粋の陽キヤは思考回路が違う。

感銘を受けていると一色はでも、と言って続けた。

「先輩だったからっていうのもあるかもですね」

「……はいはい」

少しだけ頬が紅くなるような気がするが、これはこいつのあざとさ由来。言うなれば人工甘味料だ。何言ってるか自分でもわからんが。

「本当ですよ？」

「先輩と話したいなーって思ってたら先輩がそこにいて」

なんなのこいつ？ あざとすぎない？ 何それ。小町なら愛おしくて抱きしめてる。その後多分怒られるけど。

「まあだから、世間話、ですかね？」

「語尾をあげるな。俺に聞かれても分からん」

「先輩ですもんねー」

そう言っているうちに先程と同じウェイターがやってきて氷の入った水を二つ机上に慣れた手つきで置いた。

そのまま流れるように注文を尋ねられる。

「俺はブラックと季節のタルトで」

いつもの流れなので普通に答えたのを一色は目を見開いて見ている。多分失礼なことを考えている時の顔のそれだ。

「あ、じゃあ私はラテとガトーショコラで」

そう言うとうエイターが注文を確認して、それに返事をすれば奥の厨房へと歩いていった。

「先輩他の人とも話せるんですね」

「お前は俺を何とお思いで？」

「ぼっち、コミュ障、へたれ、八幡」

「最後のがおかしい」

「ぼっち、コミュ障、へたれ」

「やっぱり全部おかしいにしても？」

「ダメですかねー」

一色はニコニコとそう言った。こいつ笑顔で悪魔みたいなことを言いよる。

それにしても何故だろうか、ひどく懐かしい感覚を思い出した。

度々一色が俺の家に来るとしてもあの日以来そんな感覚はなかったはずだ。雰囲気には絆されているせいなのだろう。らしくないことを考えるのは。

「せんぱい?」

「あ?」

「めちやくちや遠い目してましたよ今」

「ああ悪い」

「最近何かありました?」

「ある人に度々訪問されては飯を作らされる」

「……誰ですかねー。ってそういうことじゃなく」

「……何もねえよ」

そうですか、と一色が目線を落として俺に返した。

「ただ、懐かしい気分になっただけだ」

「はい?」

「ほら、生徒会室ではお前がこうやって対面にいて黙々と仕事してる? 俺が」



「ああ、なるほど。なんですかそれ、ロマンチスト？ ノスタルジック？ アイロニー？」

「最後のは多分違うな」

「なんだか横文字を羅列されてあの海浜総合の生徒会長を思い出す。名前はえーと、玉、玉な、多摩川？ 多分それだ。」

「でも先輩がそう言うこと言い出すの珍しいですね。レアですよ」

「うっせえ。平塚先生と飲みに行く時はずっとこんなんだわ」

「……あの人まだ結婚してないですよね」

「ちよつと？ 本当にあつた怖い話をいきなり始めるのやめない？」

「と思つたけれど言葉には出さない。なんだか腹に衝撃が走りそうな気がする。主に外的要因のやつ。」

「そこまで考えて咳払いをする。一色も触れてはいけなかったようにして少し沈黙が続いた。」

「……まあ、なんだゴイングマイウェイってやつだ」

「多分、そう、ですよね。あはは」

「乾いた笑いが鼓膜を揺らす。ああ、早く誰か貰ってやってくれ流石に。」

「そうこうしているとまた仕事の早いウェイター君がこれまた美しい所作で注文の品を持ってきては机上に並べた。」

「ふはあ、美味しそうですねこれ。写真撮りましょう」

「え、なに？ 一緒に？」

「もちのろんですよ。ほら、一回撮ったことあるじゃないですかー」

「そんなこと忘れてたじゃないですかー。しかも緊張しますよー。」

「先輩入って下さいね」

「一色はそういうと慣れた手つきでインカムにして画角内に俺と一色とケーキ達を写す。」

「元JKすげえやあ。」

「一色とは打って変わり、不慣れな手つきでピースをした俺が写り、その横に笑顔の一色も映る。その後にはパシヤリと機械音。色合いも光彩もバランスが良く、一色の笑顔がよく映えていた。」

「なんだか鼓動が早くなるように感じた。」

「ぎ、食べましようか」

「お、おう」

フォークを手に取り、タルトを一口大に分けて口へと運ぶ。季節のタルトということ上で上に乗っているのはいちごのようで仄かな酸味とクリームの甘味が良く伝わる。美味しい。

「先輩のおいしそうですね」

「お前もこれ頼めばよかったじゃねえか」

「はあ、これだから先輩は」

「……なんだよ」

「先輩口開けて下さい」

「は？」

思わぬ提案に素っ頓狂な声が出る。マジで意味がわからん。

「いいから」

とりあえず口を開ける。なんだか給餌を待ってる雛鳥みたいですっげえ恥ずかしい。と思考が至った時には既に口の中にビターな甘みが広がっていた。

驚いて正面を見遣る。

「……こういうことですよ」

頬赤くすんじゃねえよ。こつちまで照れるだろ。とはいえ口に入ってきたガトーショコラが美味しい。なんだかとおつても甘い。

「……俺がこれすんの？」

「だってそうする為にこれ頼みましたから、私」

いじらしくそう言う一色に思わず鼓動が逸る。

ほら、と言って一色に催促される。眼前には口を近付ける一色。

ああもうままよ。

俺はフォークに一口大に切ったタルトを乗せて一色の口へと運ぶ。もうどうにでもなれ。

「……おいひいでふよ」

「食い終わってから喋れよ……」

その後からはただひたすらに恥ずかしく、なにがなんだかよく覚えていない。覚えていることと言えば、俺の頬が熱を帯び、対面に座る

一色の頬も紅くなっていたということだけだった。

\*\*\*

「ふう、美味しかったですよ」

「そりや良かった」

話しながら夕日の東京を歩く。人々の喧騒も増え始める。その中に紛れるようにして影を並べた。

「それにしても結構高かったのに、ありがとうございました」

「まあ俺が誘ったと言えばそうなるからな。気にすんなよ」

「私後輩ですしね」

「凶々しいな」

「だって後輩ですし」

一色が胸を張ってそう言った。その後気の抜けたように力を抜いて手を後ろで組んでから俺を見上げた。

「……今年はどうなバレンタインデーでしたか？」

聞いてきたのはそんなことだった。

答えは当然決まっている。

「周りを見てから俺の顔を見ろ」

「嫌いなままなんですよね」

一色は仕方ないように眉を下げて、それと同時ににこりところちらを見る。

「じゃあ私が先輩のバレンタインデー嫌いが治る薬を処方します」

「薬剤師免許は？」

「持ってないです」

「却下」

「じゃあ服毒させてやりますよ」

怖いことを言う後輩だ。そんな風にして笑ったと思う。

「はい、先輩にあげます」

一色は持っていたコサツシュから小さな箱を取り出して手渡してくる。

それを受け取ると、少しだけ重さを感じる。

察しが良くなったのかなんだか流れからは予想できたが、思ったよりも心が躍り、内心驚いている。

ああ、俺は

「先輩、それ、本命ですから」

人々の喧騒が遠のく、鼓動の音が耳を支配して、視界は頬を染まる彼女に奪われる。

ああ、俺は、やっぱり、

「あざとい後輩が好きだ」

震える声でそう言った。一色は豆鉄砲を食らった鳩のようにこちらを見る。その後に破顔して、あどけなく微笑んだ。

「なんですかそれ」

嬉しそうに、目から一条の煌めきを伝わせて、彼女はそう言った。

「私も捻くれてる先輩が大好きですよ」

きつと、俺たちは笑っていた。

やはり、バレンタインデーは憎んでも憎みきれない。